

ICTを活用し、思考力・表現力・コミュニケーション力を向上させる教育の推進

～表鷲科（あらわしか）・道徳・各教科の学習を通して～

小中一貫校義務教育学校、表鷲科、かくありたしの像

鳥取市立鹿野中学校

〒689-0405
鳥取県鳥取市鹿野町鹿野896番地

<http://www.torikyo.ed.jp/sikano-j/>

1. 研究の背景

本校は、鹿野地域の小中学校を統合し、鳥取県初の義務教育学校（施設分離型）として平成30年4月に開校する。今まで小中合同の研究会で、思考力の向上、表現力・コミュニケーション力の育成が課題とされてきた。開校にあたって、教育課程を柔軟に編成できることを活かし新教科「表鷲科（あらわしか）」を開設し、演劇、伝統芸能、伝統工芸等の芸術活動を通して、表現力やコミュニケーション力を育成していこうとしている。また、各教科においては主体的な学びをデザインするために、対話的な学習やICTを活用した授業改善に取り組み、思考力・表現力の育成を図ってきた。

道徳では、激動する社会を生き抜くための生きる力を育成していくため、先人の生き方に学び、人生の指針となる「かくありたしの像」を生徒に探求させる授業を行ってきた。このような本校の特色ある研究は、平成30年度からの鹿野地域義務教育学校の研究の柱として、今後もさらに実践研究を深めたいと考えている。

一方で、校舎分離型の義務教育学校になるにも関わらず、小学校とのコミュニティツールは電話とメールのみであり、密な連携がとりにくい状況である。

2. 研究の目的

そこで、以下の4つを目的として、本研究に取り組んだ。

- (1)新教科「表鷲科」（平成30年度より実施）を中心とした、表現力・コミュニケーション力の育成
- (2)人物の生き方に学ぶ道徳授業の実践と充実
- (3)各教科におけるICT機器を活用した思考力・表現力の育成
- (4)ICTを活用した学校（鹿野小学校と鹿野中学校）の活性化

3. 研究の経過

- (1)新教科「表鷲科」を中心とした、表現力・コミュニケーション力の育成

本年度は、総合的な学習の時間を活用して取り組んだ。1年生は、青山学院大学荻宿教授と劇団「鳥の劇場」の劇団員さんを講師に、「表現ワークショップ」（以下「表現WS」）を今年度より行った。2年生は、劇・箏・すげ笠の3グループに分け、それぞれ地域の方を外部講師に招き、校内文化祭や地域の

施設での上演・発表をめざして準備・練習をした。この学習は、5年ほど前から行っている。3年生は、11月の「表鷲の巣立ち式」にむけた準備・練習を主に行った。この取り組みは、本校が行っている人物の生き方に学ぶ道徳授業とも連携して進めた。なお、各学年の取り組みはそれぞれ年間を通して実施した。

(2) 人物の生き方に学ぶ道徳授業の実践と充実

困難な状況を乗り越え活躍してきた人物の生き方に学び、生徒の考え方の幅を広げ、より深く生き方を考える授業実践をめざし、研究授業・公開授業を計4回行った。本格的に取り組み始めて、本年度で3年目になる実践である。

(3) 各教科におけるICT機器を活用した思考力・表現力の育成

日常的な授業において、ノートPCやタブレット端末、大型テレビやプロジェクターを使用・活用した授業を推進した。また、活用しやすいよう無線LANのアクセスポイントの設置、機器の整理・保管も行った。授業では、理科でミニ研究授業として、音楽では鳥取市中学校教育振興会音楽部会の研究授業として公開した。その他、高校調べ、沖縄修学旅行事前学習などの進路学習や学校行事においても、調べたり、まとめたりするためのツールとして積極的に活用した。

(4) ICTを活用した学校（鹿野小学校と鹿野中学校）の活性化

各校にあるPCまたはタブレット端末を1台用意し、ビデオチャットの機能を活かして顔を見合わせながら、鹿野小学校と鹿野中学校の教員が、日常的に話し合いや打合せなどができるよう計画を立てた。一時は、県内の教育機関・公立学校用ネットワークの仕様の変更により断念したが、鳥取市教育委員会の支援によりテレビ会議システムを導入することができた。

4. 代表的な実践

(1) 新教科「表鷲科」を中心とした、表現力・コミュニケーション力の育成

[1年表現WS]

1月22日（月）「鳥の劇場」の劇団員さんの指導のもと、今年度5回目の表現WSを実施した。5～6人のグループに分かれ、テーマに沿った動きから、まとまりのあるダンスを構成していった。テーマは、「焼きそば」「児童販売機」「エアコン」「こたつ」の4種類で、動きと音声（擬音）で組み立てて作品を録画（写真1）し、改善・修正していく活動を行った。表現WSは、青山学院大学の荻宿俊文教授の指導・助言も得て行っている活動で、PDCAサイクルを活用した主体的・対話



写真1 考えた動きを、鳥の劇場の方にiPadで録画していただいているところ。



写真2 劇団員さんと一緒にiPadを使って振り返り（省察）。

的な深い学びを重視しており、特に省察（Check）は自己を肯定的に捉える力やメタ認知力を高める取り組みとして行っている。本授業では、主にDoとCheckにあたる場面（写真1、2）でiPadを活用した。

[表鷲の巣立ち式]

この式は、かくありたしの像（詳しくは次の項目で後述する）を持ち、自分のこれからの生き方を巣立ちの言葉として3年生一人ひとりが宣言する式である。今年度で3回目の取り組みであるが、これまでは秋からの準備がメインだったが、今年度は夏休み前から準備を進めた（写真3）。夏休みまでに、かくありたしの像を決め、その人物について調べた。夏休みも課題として調べさせ、まとめさせた。調べるときは主に書籍を活用させたが、人物によっては書籍が乏しいためにインターネットを活用して調べた生徒もいた。9月からは、巣立ちの言葉を文章化し、11月には直前準備として発表の練習を行った。表鷲の巣立ち式（写真4）は、全校生徒のみならず保護者や地域の方も招き、約100名の前で、身振り手振り交えて、歌ってみたり、スライドを示したり（写真5、6）など、自分なりの表現の仕方一人ひとり堂々と宣言した。



写真3 書籍やインターネットでかくありたしの像調べ。



写真4 表鷲の巣立ち式。



写真5 巣立ちの言葉のキーワードを提示しながら宣言。



写真6 かくありたしの像の写真を書しだしながら宣言。

(2)人物の生き方に学ぶ道徳授業の実践と充実

生きにくい時代と言われる中、人は生き抜いていかなければならないが、そのためには人間としての「芯」、つまり確固たる自己を持っていなければならない。しかし、そう簡単に得られるものでもない。そこで、手がかりとしてそれぞれの時代を志を持って生き抜いた歴史上の人物・偉人の生き様から学ぶことができるのではということで実践してきているものである（その集大成が表鷲の巣立ち式である）。そして、「自分はこの人のような生き方をしたい。」と思えるような人物のことを「かくありたしの像」と呼んでいる。その「かくありたしの像」の生き様から学ぶために、人物の生き方に学ぶ道徳授業を積極的に行った。

本年度は、吉田松陰、手塚治虫、杉原千畝、岡潔など8名の人物を扱った。教材は、教師による自作の読み物教材を使うが、2年道徳の「岡潔の生き方にせまる」では、動画サイトにあった岡潔のインタビュー映像も視聴させた（写真7）。クラスメイトの考えや意見に加えて、読み物資料には記載されていない本人の考えや思い、志などを本人の声で知ること、新たな気づきがあったり、自分の考えを深めたりすることができた。また、副読本教材を使った学習でも、ノートPCやiPadで、サケの遡上や有名シンガーのコンサートのような動画の動画を視聴させたり、静止画でアフリカの人々の生活のようすや東京の下町の情景などを見せたりすることで、ストーリーの内容を視覚的にイメージすることができた（写真9）。

事例①：小学校事務と中学校事務が、仕事内容や事務手続きなどの確認で使用した。

事例②：小中合同交流のカルタ大会に向けての打合せに、担当者同士で使用した。

事例③：小学校教員が小学校校長に校務上の相談事あり。小学校校長が本校に来校中であったが、テレビ会議システムにて相談・協議ができた。

事例④：表現WSに関わる相談のため、鳥の劇場の劇団員さんが中学校に電話。しかし、担当教員が業務のため鹿野小に滞在中。電話対応していた中学校教員が、テレビ会議システムで担当教員に連絡。即、劇団員さんと中学校担当教員が連絡を取り合い、10分後、劇団員さんが表現WSに必要なワークシートを中学校に持ってこられた。

事例⑤：小学校の図画工作と中学校美術を兼務する中学校の美術教員。中学校より、図画工作の授業について、小学校担任とテレビ会議システムで打ち合わせをする。

事例⑥：教育委員会より不審者情報がメールにて中学校に入る。それを中学校から小学校に伝達。小学校も教育委員会からのメールで確認し、保護者に即連絡する方向で動く。しかし、中学校は校長・教頭とも出張のため中学校としての対応が決定できず。中学校教頭が出張から戻り、対応を協議。小・中同時に不審者対応についての情報を保護者に伝え、児童・生徒の安全を確保した。このときの連絡・協議はすべてテレビ会議システムである。

事例⑦：新教科「表驚科」のシラバス作成について、教務主任同士で協議。作成に向けての方向性や必要性、記述の内容や文章表現の確認のために使用した。

事例⑧：小学校校長と中学校の校長・教頭が、義務教育学校に向けての準備について協議（写真12）。事務的手続きも含め、様々な必須事項を三者にて相談、協議、確認をされた。



写真12 中学校校長（中央）、中学校教頭（右）、小学校校長（左上のテレビ）にて、義務教育学校に向けての準備に関わる協議をテレビ会議システムで行う。

このように、日常的に必要な連絡や相談ができ、緊急対応しなければならないことで足並みをそろえることができたなど、様々なことに活用できている。何よりも、小学校と中学校の教員同士が、些細なことでも、気楽に連絡や相談ができるようになったことが大きい。

5. 研究の成果

- ① ICT機器によって、振り返り（省察）をしたり、視覚的にイメージを持ったりすることができた。特に、iPadが手軽に活用できたことで、絶大な効果を得ることができた。
- ②振り返り（省察）をすることで、自分なりに表現方法を修正しようとする姿が見られるようになった。
- ③他者の意見や考えを聞くことに加え、ICT機器を活用することで、新たな気づきや意見を出し合う姿が、さまざまな授業で見られるようになった。
- ④テレビ会議システムによって、鹿野小と鹿野中の職員同士の連携が、迅速かつ密なものになった。そのおかげで、義務教育学校にむけての準備が効率よく進められている。

6. 今後の課題・展望

平成30年度からスタートする新教科「表驚科」は、すべての学びで必要となる表現力やコミュニケーション力を育成する教科として位置づけている。今年度取組んだ表現WSや、地域にある演劇・伝統芸能等

の芸術活動を通じた総合的な学習などをベースにシラバスを作成した。いよいよそれを、形にしなければならぬ。授業参観，教師同士の話し合い，職員研修などを通して，生徒のためになる表驚料にしなければならぬ。

また，表現力・コミュニケーション力の向上は推進できたが，思考力については十分とは言えない。研究方法や検証の仕方などをよく検討し，今後取り組まなければならぬ。

その他，ICT機器が充実してきた一方で，その操作や活用法について知らない教員もいる。これは，ICTに関する研修をしなかったことが原因である。短時間でも，基本的な操作の仕方や活用例を知ることができる研修を今後はしなければならぬ。

7. おわりに

今回，助成を受けたことに加えて，市教委の協力によって，本校のICT環境が一気に充実した。これにより，ICT機器に不慣れな先生でも，「先生，ICTでこんな授業や活動ってできる？」といった相談を受けることがふえた。新しい授業を目指し，大きな一歩を踏まれた先生方がおられることに，とてもうれしくなった。また，本報告書をまとめるにあたって，本校の先生方がさまざまな取り組みを，数多く実践をしておられると改めて感じた。そんな先生方とともに教育活動をさせていただいていることに自負したい。

平成30年度より，本校は施設分離型の義務教育学校としてスタートする。校舎が離れていても1つの学校として充実した教育ができるよう，日々精進していきたいと思う。

8. 参考文献

「学校とICT 2017年8月号」(S k y株式会社)

「学校とICT 2017年12月号」(S k y株式会社)

「アクティブ・モラル・ラーニングの授業づくり 中学校」白木みどり(明治図書)

「ICTモデルを適用した授業による思考力・表現力の育成に関する研究」

広島県竹原市立吉名中学校(パナソニック教育財団 平成27年度研究報告書)